研究

国学者戸坂曲浦

馬鎮神社の社家の出というが——

会員　岩田正城

戸坂曲浦は佐伯市青山の黒沢に鎮座する馬鎮神社の社掌で、国学を好み、二十余年諸国を遍遊した。

ある日某所で、宿の主人が近隣の人と共に、京都から招聘した玉田なる人が末席に戸坂曲浦の居ることに気づいて、驚いて座を退いて曲浦に師礼をつくし、衆に向って、この方は斯道の領袖戸坂曲浦先生であると語り、衆も驚いて容を改めたという。

その後、学成りて江戸白山に塾を開き、子弟を教育していたが、文政四年（あるいは三年）十一月、下野国黒羽藩主一万八千石大関増業に召抱えられたとのことである。

以上は増村先生の佐伯郷土史後篇にとりあげられているところ、又別府大学学長佐藤義詮先生がその著「学禁余稿」に書かれている概要である。

しかも佐藤先生は、たれか戸坂曲浦について知っている人はなかろうかと一般に問われている。果して戸坂曲浦なる人は、言わるる通り当地出身の著名な国学者であったのであろうか。

もしそれが事実に近いとしても、まことに青山の馬鎮神社の社掌戸高家の出であったのだろうか。

私はその戸高家の流れのもので、このことについては深い関心を寄せて、何か手がかりはないかと気にかけて久しいが、何もつかめないまま今日に及んでいる。

先生深矢勘蔵氏も戸高家について調査しようとしたが、当主は家も改築して何も残っていないと答えられたとかきいたが、私もないのがほんとうであろうと自問自答した。ただ羽柴先生が先年大分市の某書店で、主人に書軸を見せられたが、それが曲浦のものであったということと承って喜んでいるが、今どこにあるか一度拝見したいものである。

馬鎮（青山、堅田では戸高家のことを「まじめ」と呼んでいる）の戸高家は、私の亡くなった母の生家であり、祖母は坂ノ浦から戸高家に嫁し、私の幼年の頃死亡した。祖父は、祖母が私の母をみごもって生まれる以前に死亡したとのことで、母はよく「私は位牌子だった」と私に云っていた。この祖父や祖母に古い時代のことが聞けたならば、きっと曲浦のことがはっきりしたであろうし、又他のこともいろいろ興味深いことが聞けたであろうに、何もかもが永遠の謎となってしまった。

曲浦が下野国黒羽藩に召抱えられたと云われる文政四年（一八二一年）は、今から百五十年前のことである。明治元年から逆算すれば、わずか四十七年と云うことになる。

曲浦の歿年は不明であるが、かりにそれを文政の末期か天保の初期だとすれば、隔てた年数は更にちぢまって来る。明治年間の前後に生きうけた人が、わずか四十年そこそこのことを知らないこともあるまい。しかし祖父や祖母は曲浦のことを知ってか知らずか、戸高家には何の話も伝わっていない。

又、馬鎮神社の鎮座する黒沢の代木川という部落は——

戸数わずかに十戸をこえる位のまわさびしい田舎の小部落である。村から名高い学者が出たのなら、当然村にも話が伝わっている筈であるのに、私が寡聞なのかそのような話をきいたことがない。しかも曲浦は、殆んどその生涯を他国で過していたようである、実際馬鍬神社の社掌をするいとまがなかったのであろうか。考えれば色々疑問とする所が多い。

馬鍬の戸高家には伯父がいたが、元来蒲柳の質で、私の母が家をつぐべく養子を迎えたが不縁となって母は私の家に嫁し、伯父が結局戸高家をつぎ結婚もしたが子供もなかったので、私は戸高家に行った時は自由に振舞って、我が家とは区別はしなかった。草葺きの屋根ではあったが、普通の農家とは異なり、社家としての構えをみせていた。少年の頃の私にも、おのずと何か由緒があると思って何か見つかりはしないかと家の中を探したことがあった。しかし古い文書は勿論書物も見つけることは出来なかったが、ただ書箱があって、それには「戸高天涯」と鮮やかに書かれてあった。それは今もなお忘れてはいない。然しこの天涯とは誰であるかわからない。この戸高家、今は他家の人が後を継ぎ、家も改築されているので見ての手がかりはなくなってしまった。

母が戸高家にいた頃の家の経済状態であるが、田舎のちいさい神社の社家の経済が豊富であろう筈がない。しかも実祖父は早く世を去っている、赤貧に堪えたことであろうし、田畑を耕作して生活の一助としたのは勿論のこと、母はろくな教育もうけずに、家の為に働いたらしい。

数々の古文書があるほどの家でもなかったが、何かあったとすれば生活のたしとしたのではなかろうか。でなければ自然に散逸してしまったのだろう。

ある時戸高家で粗末なものではあったが、小さな軸物を見つけだしたので、これは珍らしいものがあった。何かいわれもあろうかと私の家に貰って帰ったことがある。それにはたしか馬鍬神社の神の御姿と牛がえがかれてあったように覚えている。価値の高いものでもなかったろうが、何かの手がかりになったかも知れないのに、私の不始末でおしいことに今はその所在がわからない。

墓石を見たら何かのいとぐちがつかめればしないかと、ある日墓地にも参ってみたが、歴代の墓標がわかるような立派なものではなく、一基、二基、古色蒼然としたものもあったが、結局墓石からも手がかりはつかめなかった。

今は故人となられた足田泉先生に、

「曲浦は戸坂と言われているが、馬鍬家は戸高である、これはどういうことでしょうか。」

とお尋ねしたところ、先生は、

それは戸高でも戸坂でも同じである。今とちがって昔は自由に使っていた。他にも例のあることだ。」

と教えて下さったが、曲浦その人については先生も知られなかったらしい。

先生はついでに私の祖父のことについて話して下さった。祖父は足田家には常に出入りして相当お世話になったらしい。

筆は名人の域に達していたと、他の人からも聞いていたが、足田先生のお父さんも私の祖父から筆を習ったそうで、上手だったと言われていた。

又和歌をたしなみ、常に古今集をふところに入れていたそうで、先妻を失い後妻を迎えた折、

昨年は代して家の年　当年は

新荒嫁をだいて子の年

とよんだという。又酒に目がなく、疋田家では縁手にとり出しては飲んでいたそうで、酩酊したある日組相して疋田家へお手伝さんがたしなめたところ、

巌めが天上人の真似をして
ひたたれかける四位の少将

とよんだ。又ある折茶に出て、其地の路傍で一憩しているところへ、近郷の人が二、三人、町から兜針を買ってさげて帰るのを見て、

さげてゆく諏訪法性の兜鉢
定めしやすく甲斐の信玄

とやって村人に見せたところ、村人達は感じ入って心が通じたのか請あるるまま、暫時その家にとどまり歌をよんだそうである。

又祖父の書を堅田のある家で見たことがあるが、その家がどこであったか。思い出せない。或はそれは曲浦の書ではなかったか

人間の世界のことは、僅か昨日の事でさえその真相がわからないことがある。まして遠い昔の事ともなれば、どのように解明につとめてもわかりかねるものである。だが不断に心にかけて追求することによって、其の真相は追々明らかになるものと思う。

戸坂曲浦のことも結局はわからないの一語につきるわけであるが、以上掲げた色々な点から何かの手がかりをつかもうとしたが、内容の乏しかったことをお詫びしたい。曲浦について、何か御存知の方があったら御教えいただきたいと希望する次第である。

（住所　佐伯市下堅田字　柏江）

書論

わが佐伯家の伝承

本会会員　佐　伯　利　明
本籍地　北九州市若松地区
勤務地　熊本市

佐伯氏、推定の後はどうなっているか――この問題の一つの資料を熊本市御勤務の佐伯会員から編集者宛に寄せられました。お願いして掲げます。一部省略しました点お許し下さい。例点は編集者がつけました。（羽柴）

（前略）

私、史談会に入会させて戴きましたのも御存知の通り、父が生前、先祖が祭られているのは龍護寺だと伝え聞いているので一度行ってみたいと云っていたので、先年龍護寺を訪れた折、先生にお会い出来た縁からです。

その後転勤も今度で二回で、生家の若松には年に一、二度帰るのみで、生家には現在小倉区役所の社会課に勤めている弟鎮人がいますが、あまり弟は家系に関心がなく、又、私自身調べる暇もなくそのままに打過ぎています。生家には手がかりになるものも殆んどなく、家系については伝説的で、ただ幼い頃祖父母、両親などから聞いた話だけです。

それは、家の先祖は豊後から輿に乗って、この若松に来て、古前の里に住みついて、丁度私で二十代目だということ、かつては大庄屋をしていたということ、先祖はかつて豊後に住んでいた土地の様に古前を神仏に囲まれた土地にしたこと、などです。

古前というところは昔は遠賀郡藤木村の小字です。藤木村については野村家（黒田藩の家老）の拝領地で、村の長は佐伯氏と